

鶴見大学図書館第八十五回貴重書ミニ展示

## 斎藤茂吉旧蔵『金槐和歌集』 解説

会期…二〇二三年一月二〇日(金)～二月一〇日(金)

\*開館時間などの詳細は図書館ホームページをご確認ください。

会場…鶴見大学図書館一階エントランスホール

『<sup>きわい</sup>金槐和歌集』は鎌倉幕府第三代將軍の源実朝(一一九二～一二一九)の私家集。「金」は鎌倉の「鎌」の偏、槐は太政大臣・左大臣・右大臣の総称「三槐」にちなむ。実朝は初代將軍頼朝と北条政子の子。兄で二代將軍の頼家が失脚した後、將軍となるが、幼少であったため、母の政子が実権を握った。二七歳で右大臣に任ぜられ、翌承久元年(一二一九)正月、鶴岡八幡宮における拝賀の際、頼家の子公暁に暗殺された。

実朝は政治的実権を握っていなかったためか、若いころから和歌への関心が強く、当時の京都歌壇の重鎮である藤原定家(一一六二～一二四一)に師事した。『金槐和歌集』は貞享四年(一六八七)に刊行された版本が長らく流布本であった。特に江戸中期の国学者である賀茂真淵(一六九七～一七六九)は実朝を称揚して、『金槐和歌集』に評語を加えた。斎藤茂吉が収集したのも、主にこの系統の伝本である。しかし、これは室町幕府第九代將軍の足利義尚が編纂したもので、小川剛生「足利義尚の私家集蒐集とその伝来について」和歌文学研究一〇六、二〇一三年六月、実朝の時代からは二五〇年以上も後のことであった。

ところが、昭和初期に実朝自身が定家へ贈ったと見られる伝本が発見され、それは右の版本とは内容の異なるものであった。それ以降、『金槐和歌集』は貞享四年版本系と定家所伝本系の二種に大別されている。なお、定家所伝本が発見された当時、斎藤茂吉は四〇代で、まさに実朝研究を進めている途中であった。

斎藤茂吉(一八八二～一九五三)は明治から昭和にかけての歌人。「童馬山房主人」と号した。山形県の農家に生まれ、東京帝国大学医科大学に進む。卒業後は東京府巢鴨病院に勤めつつ精神病学を学び、ドイツ・オーストリアへ留学。帰国後は青山脳病院を再興して院長となる。

中学時代から文学に興味を抱き、特に第一高等学校進学後は短歌に熱中する。正岡子規(一八六七～一九〇二)に傾倒して、その門下の伊藤左千夫(一八六四～一九一三)に師事するとともに、森鷗外(一八六二～一九二二)などからも大きな影響を受けた。歌集『赤光』『あらたま』『白桃』など。一方で、『柿本人麿』(岩波書店、一九三四年)によって帝国学士院賞を受賞したように、茂吉は古代の和歌や歌人の研究にも力を注いだ。その中で、実朝は子規が高く評価した歌人であり、茂吉はまず『金槐集私鈔』(春陽堂、一九二六年)に研究成果をまとめ、次いで『金槐和歌集 新訂』(岩波文庫、一九二九年)の校訂を担当した。『金槐和歌集』の定家所伝本が発見されたのは、ちょうどこのころである。この新出の伝本に対する茂吉説は『源実朝』(岩波書店、一九四三年)、『斎藤茂吉全集19源実朝』(岩波書店、一九七三年)にまとめられた。

このように、茂吉は『金槐和歌集』の新出伝本の発見を目の当たりにし、さらなる未知の伝本の発見を期待して、約二〇種もの『金槐和歌集』の伝本を収集した。残念ながら定家所伝本を超える大発見には至らなかったが、茂吉の収集によって多くの貴重な伝本が現在にまで残されている。鶴見大学図書館には、その約半数の九種が一括して収められている。ほとんどに茂吉の書き入れがあり、実朝研究への情熱が感じられよう。実朝研究の資料としてはもちろん、茂吉研究の資料としても価値がある。

以下、九種の書誌を記す。太字は展示中の資料。

### ① 版本三冊(賀茂真淵(一六九七～一七六九)評語書入本)

登録番号、一二八七六三二～一二八七六三四。貞享四年(一六八七)刊(後印)。袋綴三冊。薄緑色布目地表紙(原装)。縦二二・〇糎×横一五・五糎。外題、表紙左肩の黄色地双枠刷題簽(縦一六・五糎×横三・二糎)に「金槐和歌集 壹(一三)」。内題、「金槐和歌集卷之上(下)／春部(下雑部) 鎌倉右大臣実朝卿家集」。尾題、卷一「上巻終」、卷二「金槐和歌集卷中終」。墨付、卷一は三一丁(ほかに序を補写した一丁を冒頭に綴じ込む)、卷二は一〇丁、卷三は二〇丁。いずれも遊紙なし。料紙、楮紙。見返しも同じ。每半葉二一行。和歌一行。詞書、約五字下げ。匡郭、縦一八・一糎×横一三・七糎(单枠)。版心、卷一「右上 一(三十二)」(ただし、十五丁目「十五六」、卷二「右中 一(十二)」(ただし、四丁目「四五」、卷三「右下 一(十五)」)。本文末尾に「右之一帖者鎌倉右大臣家集京極中納言(定家卿)門弟此道之達者云々

然最初雖／部類在不審尚之間重而改之畢尤可為／證本者乎 柳營亜槐（判）、実朝の略系図、公卿補任の抄出あり。広告「浪華書房 心齋橋通博勞町角 河内屋茂兵衛藏板」（版心「群玉堂」）五丁。刊記「貞享四丁卯歳仲夏上浣 北村四郎兵衛板行」（巻三本文末尾）。奥付「京都寺町通佛光寺 河内屋藤四郎／江戸日本橋通壹丁目 須原屋茂兵衛／同 貳丁目 山城屋佐兵衛／同 貳丁目 須原屋新兵衛／同 四日市 山城屋政吉／同 本石町十軒店 英大助／同 下谷御成道 英文藏／同 大傳馬町貳丁目 丁子屋平兵衛／同 芝神明前 岡田屋嘉七／大阪心齋橋通本町角 河内屋藤兵衛／大阪心齋橋筋博勞町角 河内屋茂兵衛」（下巻裏見返し）。蔵書印、各冊冒頭右下に「茂吉藏書」（朱・陽・方・単。縦三・九糎×横一・三糎）。全体に朱の書入れ（茂吉筆でない）、歌頭の丸あり。斎藤茂吉「金槐集の傳本」（『斎藤茂吉全集19源実朝』岩波書店、一九七三年）に「いづれも大同小異で特に此處に記入するほどのものではない」と言及される「刊本十一部」のひとつか。

## ② 版本三冊（茂吉が静嘉堂文庫本と校合）

登録番号、一二八七六三五～一二八七六三七。貞享四年（一六八七）刊（後印）。袋綴三冊。薄緑色布目地表紙（原装）。縦二・〇糎×横一五・五糎。外題、表紙左肩の黄色地双粹刷題簽（縦一六・五糎×横三・二糎）に「金槐和歌集 壹（三）」。巻一の表紙右上に「静嘉堂文庫本」と墨書。内題、「金槐和歌集卷之上（下）／春部（雑部） 鎌倉右大臣実朝卿家集」。尾題、巻一「上巻終」、巻二「金槐和歌集卷中終」。墨付、巻一は三二丁、巻二は一〇丁、巻三は一五丁。いずれも遊紙なし。料紙、楮紙。見返しも同じ。每半葉一行。和歌一行。詞書、約五字下げ。匡郭、縦一八・一糎×横一三・七糎（単粹）。版心、巻一「右上 一（三十二）」（ただし、十五丁目「十五六」、巻二「右中 一（十一）」（ただし、四丁目「四五」、巻三「右下 一（十五）」）。本文末尾に「右之一帖者鎌倉右大臣家集京極中納言／（定家卿）門弟此道之達者云々然最初雖／部類在不審尚之間重而改之畢尤可為／證本者乎 柳營亜槐（判）、実朝の略系図、公卿補任の抄出あり。刊記「貞享四丁卯歳仲夏上浣 北村四郎兵衛板行」（巻三最終丁）。奥付「京都寺町通佛光寺 河内屋藤四郎／江戸日本橋通壹丁目 須原屋茂兵衛／同 貳丁目 山城屋佐兵衛／同 貳丁目 須原屋新兵衛／同 四日市 山城屋政吉／同 本石町十軒店 英大助／同 下谷御成道 英文藏／同 大傳馬町貳丁目 丁子屋平兵衛／同 芝神明前 岡田屋嘉七／江州 八日市 小杉文右衛門／大阪心齋橋筋博勞町角 河内屋茂兵衛」（下巻裏見返し）。前掲「北村四郎兵衛板行」（下巻末尾）の右に「昭和七年五月五日后静嘉堂文庫／に來りて写之。斎藤茂吉記」と朱書。蔵書印、各冊冒頭右下に「毛山文庫」（朱・陽・方・単。縦四・五糎×横一・七糎）、その上に「村上藏書」（朱・陽・楕円・単。縦二・六糎×横一・五糎）、次行の「春（雑）部 鎌倉右大臣」の間の余白に「茂吉藏書」（朱・陽・方・単。縦三・九糎×横一・三糎）。茂吉による朱の書入れは巻三に多い。斎藤茂吉「金槐集の傳本」（『斎藤茂吉全集19源実朝』岩波書店、一九七三年）に紹介される。

## ③ 写本一冊（賀茂真淵（一六九七～一七六九）評語書入本）

登録番号、一二八七六三八。（江戸後期）写。尾崎雅嘉（一七五五～一八二七）筆。袋綴一冊。砥粉色地藍色牡丹唐草文様表紙（原装）。縦二・三・六糎×横一六・二糎。外題、表紙左肩の白題簽（縦一六・四糎×横三・四糎）に「金槐集 賀茂真淵校本」（本文同筆）と書写。内題、「金槐和歌集卷上／春部 鎌倉右大臣実朝家集」（五才）、「金槐和歌集卷之中／恋之部」（三六才）、「金槐和歌集卷下／雑部」（四五ウ）。墨付、六〇丁。遊紙、前後各一丁。料紙、楮紙。見返しも同じ。每半葉一行。和歌一行。詞書、約五字下げ。字高、約一七・九糎。冒頭に賀茂真淵による宝暦五年（一七五五）の序あり。本文末尾に「右之一帖者鎌倉右大臣家集京極中納言（定家卿）／門弟此道之達者云々 然最初雖部類在不審／尚之間重而改之畢尤可為證本者乎／柳營亜槐（判）、実朝の略系図、公卿補任の抄出あり。前見返しに「貞享四年刊系統本／尾崎雅嘉自筆寫／昭和十七年初秋大阪ヨリ求／童馬山房主人」と墨書。蔵書印、一才右下に「可庵」（朱・陽・方・単。縦一・四糎×横一・二糎）。本文冒頭に「朱 異本／墨 真淵本」と注記されるとおり、雅嘉自身によって二種の本と丁寧校合されている。斎藤茂吉「金槐集の傳本」（『斎藤茂吉全集19源実朝』岩波書店、一九七三年）に紹介され、朱で校合された「異本」は「類従本」と指摘される。

尾崎雅嘉は江戸後期の国学者。『群書一覽』『続異称日本伝』『蘿月庵国書漫抄』をはじめとする多くの著書があり、なかでも『百人一首一夕話』は著名。

④写本一冊(賀茂真淵(一六九七〜一七六九)評語書入本)

登録番号、一七八七六三九。明治一七年(一八八四)写。乃美勝光筆。袋綴一冊。灰色無地裂表紙(原装)。縦二四・四糎×横一六・七糎。表紙左肩の白題簽(縦一六・〇糎×横三・四糎)に「金槐和歌集 全」(本文同筆)と書写。保護表紙は山吹色草木鳥文様裂表紙(寸法同前)(原装)。左肩の銀紙題簽(寸法同前)に「金槐和歌集 全」(本文同筆)と書写。内題、「金槐和歌集卷之上/春部 鎌倉右大臣実朝公歌集」(五才)、「金槐和歌集卷之中/恋之部 鎌倉右大臣実朝公歌集」(三九才)、「金槐和歌集卷之下/雑部」(四九才)。墨付、六二丁。遊紙、前後各一丁。料紙、楮紙。見返しも同じ。每半葉一〇行。和歌一行。詞書、約五字下げ。字高、約一九・二糎。冒頭に「鎌倉の右大臣の家集をよみて書つ」と題する賀茂真淵による序あり。本文末尾に「明治十あまり七ノ年春雨/そよきてつれ/なる窓/のもとにしるす勝光」(本文同筆)、署名の左に「白華/老人」(朱・陰・楮円。縦一・六糎×横一・五糎)、「勝/光」(朱・陰・円。直径一・二糎)の印あり。丁を改め「金槐集一冊肥後柿原村の人/勾坂勝光氏の筆写 書き入れば/小山多乎理氏なり」と誤記/大正十五年七月吉日/赤星信一/小山多乎理氏の門人にして柿原桜山の人/乃美勝光氏筆写なり」(本文別筆)と墨書。「誤記」は朱で、傍線部は朱の二重線で抹消。蔵書印、前遊紙才右下「赤星信一蔵書」(黒・陽・方・単。縦三・六糎×横一・三糎)、その左に「茂吉蔵書」(朱・陽・方・単。縦三・九糎×横一・三糎)。一才右下に前掲「茂吉蔵書」、その下に「桜山/文庫」(朱・陽・方・単。縦二・九糎×横二・八糎)。全体にわたって朱の書入れ「本文同筆」、歌頭に「好古」の朱印(縦一・四糎×横〇・七糎)あり。斎藤茂吉「金槐集の傳本」(『斎藤茂吉全集19源実朝』岩波書店、一九七三年)に「いづれも貞享本(眞淵校)を寫したるものである」と説明される「寫本五種」のひとつか。

⑤版本一冊(賀茂真淵(一六九七〜一七六九)評語書入本)

登録番号、一七八七六四〇。貞享四年(一六八七)刊(後印)。袋綴一冊。元来三冊であったものを総裏打のうえ一冊に合綴した。紺色無地表紙(後補)。縦二七・九糎×横一九・九糎。外題なし(表紙左肩の縦一八・一糎×横三・一糎の白題簽は空白のまま)。内題、「金槐和歌集卷之上(下)/春部(下)雑部」 鎌倉右大臣実朝卿家集」。尾題、卷一「上巻終」、卷二「金槐和歌集卷中終」。墨付、卷一は三二丁(ほかに序を補写した二丁が冒頭にあり)、卷二は一〇丁、卷三は二〇丁。遊紙なし。料紙、楮紙。每半葉一一行。和歌一行。詞書、約五字下げ。匡郭、縦一八・二糎×横一三・六糎(単枠)。版心、卷一「右上 一(三十二)」(ただし、十五丁目「十五六」、卷二「右中 一(十一)」(ただし、四丁目「四五」、卷三「右下 一(十五)」)。冒頭に賀茂真淵による宝暦五年の序を補写。本文末尾に「右之一帖者鎌倉右大臣家集京極中納言/〈定家卿〉門弟此道之達者云々 然最初雖/部類在不審尚之間重而改之畢尤可為/證本者乎 柳宮重槐(判)」、実朝の略系図、公卿補任の抄出あり。刊記「貞享四丁卯歳仲夏上浣 北村四郎兵衛板行」(卷三末尾)。最終丁左端に「斎藤茂吉君にまゐらず/昭和三年五月廿日 仙台にて/阿部次郎」。蔵書印、補写された序の一才右下に「待賢堂」(朱・陽・楮円・双。縦三・六糎×横二・六糎)、その上に「茂吉蔵書」(朱・陽・方・単。縦三・九糎×横一・三糎。卷一の冒頭右下にも)。最終丁左下に「江戸四日市/古今珍書會/達摩屋五一」(朱・陽・方・飾枠。縦三・三糎×横二・八糎)。全体に墨と朱の書入れ(ともに同筆。茂吉筆ではない)、歌頭に朱の丸がある。斎藤茂吉「金槐集の傳本」(『斎藤茂吉全集19源実朝』岩波書店、一九七三年)に紹介される。

⑥版本三冊(賀茂真淵(一六九七〜一七六九)評語書入、楳取魚彦(一七二三〜八二)校正本)

登録番号、一七八七六四一〜一七八七六四三。貞享四年(一六八七)刊(後印)。袋綴三冊。黒色無地表紙(原装)。縦二二・五糎×横一五・七糎。外題、表紙左肩の刷題簽(白地無枠。縦一七・四糎×横三・一糎)に「鎌倉右大臣家集上(下) 春夏/秋冬(下)雑/神祇」、右端に「賀茂真淵翁評 楳取魚彦校正(墨)」と朱書(巻下のみ「墨」なし)。内題、「金槐和歌集卷之上(下)/春部(下)雑部」 鎌倉右大臣実朝卿家集」。尾題、巻上「上巻終」、巻中「金槐和歌集卷中終」。墨付、巻上は三二丁。巻中は一〇丁、巻下は一五丁(ただし、八丁目は補写)。いづれも遊紙なし。料紙、楮紙。見返しも同じ。每半葉一一行。和歌一行。詞書、約五字下げ。匡郭、縦一八・三糎×横一三・七糎(単枠)。版心、卷一「右上 一(三十二)」(ただし、十五丁目「十五六」、卷二「右中 一(十一)」(ただし、四丁目「四五」、卷三「右下 一(十五)」)。刊記「貞享四丁卯歳仲夏上浣 北村四郎兵衛板行」。上巻前見返しに「此ノ魚彦校正本ハ/昭和

七年九月二十二日、窪田空穂氏所蔵本ニ抛リテ筆ノ写シ了。評言中、「秋成云」「尚賢按」等ノ語アルヲ以テノミレバ全文尽クハ真淵ノ言ニハアラジ、他ノ書入アル金槐ノ集ヲバアハセ見ルベシ。斎藤茂吉識」と朱書（「尚賢按」の次に「探玄云」を黒で補入）。蔵書印、各冊冒頭右下に「茂吉藏書」（朱・陽・方・単。縦二・九糎×横一・三糎）。全体にわたって茂吉による朱の書入れあり。斎藤茂吉「金槐集の傳本」（『斎藤茂吉全集19源実朝』岩波書店、一九七三年）に紹介される。

楫取魚彦は江戸中期の国学者。賀茂真淵の門下で奥門四天王の一人と称された。家集『楫取魚彦家集』『香取四家集』。著書『続冠辞考』『古言梯』など。『百人一首略伝』は③に挙げた尾崎雅嘉『百人一首一夕話』の基になった。

### ⑦写本一冊（賀茂真淵（一六九七〜一七六九）評語書入本）

登録番号、一二八七六四四。（江戸後期）写。袋綴一冊。縹色地花竜文二重亀甲型押表紙（後補）。縦二・三・六糎×横一・六・八糎。外題、表紙左肩の白題簽（縦一・六・五糎×横三・三糎）に「一」右大臣歌集 全（「本文別筆」と書写。内題、「金槐和歌集ノ鎌倉右大臣実朝卿家集ノ春部」（二一才）、「金槐和歌集卷之中ノ恋之部」（三八ウ）、「金槐和歌集卷下ノ雑部」（四六才）。墨付、六〇丁。遊紙なし。料紙、楮紙。見返しも同じ。每半葉八行。和歌二行（上句末で改行）。詞書二字下げ。字高、約一八・一糎。冒頭に「鎌倉の右大臣の家集をよみてかきつ」と題する賀茂真淵による序あり。裏見返しに「昭和十年夏小野寺八千枝夫人ノ予ノタメニ購求之贈ラル茂吉記」と墨書。蔵書印、一才右下に「篁園文庫」（朱・陽・方・単。縦三・八糎×横一・三糎）。その左に「茂吉藏書」（朱・陽・方・単。縦三・九糎×横一・三糎）。全体に朱の書入れあり（本文同筆）。斎藤茂吉「金槐集の傳本」（『斎藤茂吉全集19源実朝』岩波書店、一九七三年）の「寫本五種」のひとつで、「千蔭筆と称するもの（小野寺氏惠贈）あるが、真筆でなく、脱落した歌さへ数首ある」と記される本であろう。ただし、「千蔭筆」といった記述はなく、根拠不明。参考として展示した『萬葉新採百首』は賀茂真淵が『万葉集』から百首を選び、千蔭が書を担当したものだが、その筆跡と比較すると、たしかにこの『金槐集』は千蔭筆と言いがたい。

### ⑧写本一冊

登録番号、一二八七六四五。（江戸後期）写。袋綴一冊。浅縹色布目地表紙（原装）。縦二・一糎×横一・五・四糎。外題、表紙中央の題簽（白地双杵。縦一・七・五糎×横三・七糎）に「鎌倉右大臣集評賀茂真淵著」（「本文同筆」と書写。内題なし。墨付、八丁。遊紙なし。料紙、楮紙。見返しも同じ。每半葉一七・八行。和歌一行。字高、約一八・〇糎。奥書・識語なし。蔵書印なし。冒頭に賀茂真淵による宝暦五年の序あり。真淵が評を加えた歌を中心に抄出したもの。斎藤茂吉「金槐集の傳本」（『斎藤茂吉全集19源実朝』岩波書店、一九七三年）に「いづれも貞享本（真淵校）を寫したるものである」と説明される「寫本五種」のひとつか。

### ⑨写本一冊（賀茂真淵（一六九七〜一七六九）評語書入本）

登録番号、一二八七六四六。（江戸後期）写。袋綴一冊。茶色網目表紙（後補）。縦二・六・一糎×横一・八・二糎。外題、表紙左肩の題簽（白地に朱双杵。縦一・六・一糎×横三・九糎）に「鎌倉右大臣家集 全」（「本文別筆」と書写。内題、「金槐和歌集卷之上ノ春部 鎌倉右大臣実朝卿家集」（五才）、「実朝」の右に「実朝」、左に「公」と朱書（本文同筆）、「金槐和歌集卷之下ノ鎌倉右大臣実朝卿家集」（三三ウ）。尾題、「金槐和歌集卷之上終」（三三才）。墨付、四七丁。遊紙、前後各一丁。料紙、楮紙。見返しも同じ。每半葉一二行。和歌一行。詞書、約三字下げ。字高、約二〇・七糎。冒頭に賀茂真淵による宝暦五年の序あり。本文末尾に「右之一帖者鎌倉右大臣家集京極中ノ納言（定家卿）門弟此道之達者云々然最初ノ雖部類在不審尚之間重而改之畢尤ノ可為證本者乎ノ柳宮重柳（判）」、「実朝の略系図、公卿補任の抄出の後に「貞享四丁卯歳仲夏上浣」。後遊紙ウ中央に「昭和十三年二月東京ニテ求ノ（斎藤琳琅閣ニテ）斎藤茂吉記」と墨書。蔵書印、前遊紙才右下に「茂吉藏書」（朱・陽・方・単。縦二・九糎×横一・三糎）。その左に「嚴樞本ノ於斯傳」（朱・陽・方・単。縦四・五糎×横三・四糎。四ウ中央と最終丁左下にも）。五才右上と最終丁左下に「徳ノ潤身」（朱・陽・方・単。縦一・一糎×横二・一糎）。全体に黒と朱による書入れあり（本文同筆）。貼紙も散見（本文同筆）。斎藤茂吉「金槐集の傳本」（『斎藤茂吉全集19源実朝』岩波書店、一九七三年）に「いづれも貞享本（真淵校）を寫したるものである」と説明される「寫本五種」のひとつか。